

地方小規模短大における保育の〈理論・実践〉問題の捉え方 ～今後の保育者育成環境を考える～

仁愛女子短期大学 増田 翼

本発表の目的は、人口減少期を迎えている地域に立地する、いわゆる「地方小規模短大」において、保育の〈理論・実践〉問題をどのように捉えるべきなのかを考察することにある。私自身もかつて試みたことがあるが、〈理論・実践〉関係を問うこの種の議論をしていくと、ある教育(学)者の内部において〈理論・実践〉関係はどう捉えられているか、あるいは一般論として教育学における〈理論・実践〉関係をどう捉えるべきか、という論調に落ち着きやすい¹⁾。しかし本発表は、養成校教員として保育(学)理論と現場保育者の実践をどのように結び結ぶか、という観点での〈理論・実践〉関係を問うことを主眼に置いていきたい。

1. 問題の背景

そもそも、福井県には保育者養成課程を設置している大学・短期大学、専門学校がごく少数しか存在しない。そのため福井県における保育者供給源は、私の勤務校である仁愛女子短期大学幼児教育学科²⁾と、同学園が設置している仁愛大学子ども教育学科が主となっている。ところがここ数年、福井県内高校女子生徒数の減少³⁾や、近隣県(石川・滋賀・京都・大阪・岐阜・愛知)への県外流出増加(四年制大学が入学しやすくなった)により、保育者として輩出できる卒業生の数が以前と比べて減少し始めている。他方、福井県内の保育施設はどれも人手不足が深刻である。人がいないので労働環境が悪化し、それがまた保育職志望者減につながる、という悪循環が顕在化しつつある。

人口数や保育職志望者数が減少すると、保育者の養成・採用・研修といったことにどのような影響が出てくるのか。すぐに思い浮かぶのは、次の3点である。すなわち、人が少ない地域では、①競争(選抜)が上手く機能せず、志望さえすれば、ひとまず保育の道に入ることができてしまう(＝質がばらつく、二極化していく)、②人材確保に難渋し、一人辞めることが多大な損失につながる、③身近で多様な経験をする機会が失われていく(＝県外流出の動機を止められなくなる)、といった負の連鎖が顕著となるのである。このような悪循環や負の連鎖が続けば、当然、現場保育者たちの保育に対するイメージは低下する一方であり、それがお互いの自信喪失や疲弊感の蔓延といった事態を余計に引き起こしてしまう。こうした状況を転じて、素朴に「保育って楽しい」「保育ってすばらしい」という感情に満たされるためには、どうしたらよいのだろうか。

2. 何を問いたいのか

上記のような背景のもと、現在私は、少しでも保育に関係する人々の〈持続可能性〉を高めるためにはどうしたらよいか——養成・採用・研修などが好循環のもとで実施されることで、多くの保育関係者が持続的な安定感に満たされ、将来を見据えた保育活動やマネジメントを展開できるようになるのではないだろうか——を模索している⁴⁾。その模索のなかで見えてきたことは、〈持続可能性〉の如何を大きく左右するのは、本シンポジウムのテーマにもある、保育(学)における〈理論・実践〉問題の捉え方なのではないか、ということである。

ここで具体的に、私が何を問いたいのかまとめておく。①理想とすべき保育の〈理論・実践〉関係とはどのようなものか、②その理想的関係の実現が、上述のように悪循環、負の連鎖に悩まされている現場保育者にとって(人口減少社会にとって)意味をもつのか、③意味をもつとすれば、その関係の実現に向けて養成校教員としてできることは何か。以下では順を追って考察してみたい。

3. 理想とすべき保育の〈理論・実践〉関係とはどのようなものか

たとえば、かつてヴェーニガー(Erich Weniger, 1894-1961)が、「教育的活動は、理論によって前から、そして後ろから包囲され支えられている。実践はその行為の前提としての理論を含み、さらに行為の結果としての理論を通じて『経験』へと仕上げられる⁵⁾」と述べているように、個人としての保育者は、実践を方向づける道しるべとしての前理論と、自分の実践を意味づけたり経験を再構成していく際に刻まれていく後理論によって支えられている。さらに個人という視点をとび越えて、理論を提供する機会の多い集団＝研究者集団(養成校教員)と、実際に現場において実践を担っている保育者集団との関係性という視点に置き換えたとしても、おそらく同様の構図が確認できるはずである。すなわち、理論側を代表する養成校教員は、保育者の明日の実践を今まで以上によく方向づけるような前理論を提供するとともに、保育者のこれまでの実践を意味づけ経験の再構成に寄与するかたちで理論化を試みたりしているはずである。こうしたことは、現場研修、免許状更新講習、キャリアアップ研修等を通じて、多くの養成校教員がすでに担っていることであろう。したがって特段、理想とすべきものとはいえないかもしれないが、養成校教員と現場保育者との関係を考えるうえで忘れてはいけない視点である。

4. 理想的関係の実現が現場保育者にとって（人口減少社会にとって）意味をもつのか

この点が本発表において最大の関心事なわけだが、「意味を持つのか」という問いに対しては、次のようにもいえるだろう。つまりは、理想的な〈理論・実践〉関係の実現が、悪循環、負の連鎖を断ち切ることができるのかどうか、と。この答えとしては、まずもって関係の実現が保育職志望者数をはじめとする保育関係者全体の増加に結びつくのかどうか鍵となる。さらには、自信の回復や職場環境の改善等により保育に対するイメージ全体の向上が図られなければならない。このようなことは本当に可能なのであろうか。

私はここにこそ、従来の保育学が見落としやすく反省しなければならない点が潜んでいると確信している。すなわち我々は、以下のことを自省すべきなのである。「保育者の明日の実践を今まで以上にによりよく方向づけるような前理論を提供」したり、「実践を意味づけ経験の再構成に寄与するかたちで理論化を試み」たりする際に、現場保育者が保育の「専門性」を最大限意識できるように配慮してこれたのだろうか、と。そもそも「専門性」とは、他との違いを明確化する範囲（領域）を示すものであって、他では求められない独自の要素＝独自性が謳われなければならない。それは外側から眺めれば、保育をよく知らなかった人が感じる保育の「魅力」ともいえるものであり、対外的な存在証明となるはずのものである。このような意識が、果たして我々養成校教員にどこまで備わっていたのだろうか。「保育者の明日の実践を今まで以上にによりよく方向づけるような前理論を提供」したり、「実践を意味づけ経験の再構成に寄与するかたちで理論化を試み」たりするということは、保育の「専門性」「独自性」「魅力」を言葉にし共有するとともに、そのプロセスにおいて自信を取り戻したり、保育のすばらしさを再確認することに相違ないはずである。換言すれば、我々は理想的な〈理論・実践〉関係を実現していくなかで「専門性」について絶えず問い、その議論を通して「保育」を守っていかねばならないのである。ここまでの意識が存在すれば、理想的関係の実現は十分に人口減少社会において意味を有するといえるであろう。

5. 理想的関係の実現に向けて養成校教員としてできることは何か

思い返してみれば、保育を詳しく知らない人に対して保育の「専門性」を伝える、という仕事を日常的に担っているのは、我々養成校の教員である。養成校教員は、ときには高校を訪問し、保育の「魅力」を一つひとつ伝えながら保育職志望の高校生募集を行っている。また、養成校の授業においても、まだ保育とは何かをよく知らない学生たちに対して、その原理や本質を伝えている。さらに養成校教員は、保育現場側に対しても種々の研修等で大きな関わりを有しており、その地域の保育全体を見渡すことが可能な立場にある。このように考えれば、特に福井県のように人口減少期を迎え、各セクションにおいて悪循環が生じているような地域にあっては、その現状を好循環へと転換する役目を率先して担うべきは、やはり養成校教員において他にはいないといえるだろう。我々の担うべき役割を意識することこそが、ゆくゆく保育そのものを守り抜くことにつながっていくのはいうまでもない。

ところで、たしかに保育者養成校というのは、各学問分野研究者の寄せ集めによって成立しており、なかなかそれらを束ねる軸が見つけにくい、というのは否めない⁶⁾。しかし、上記のように養成校教員が率先して地域の保育の〈持続可能性〉を支えていくためには、せめてこれだけは、という軸を共有する必要があるだろう。本発表では何度も示してきたことだが、この共有すべき軸こそが「専門性」「独自性」「魅力」である。今こそ、とにかく「専門性」「独自性」「魅力」といったことを養成校教員が主導となりながら、現場保育者との協働のもとで盛んに議論しなければならない。これこそが、「地方小規模短大」における保育の〈理論・実践〉問題の捉え方なのではないだろうか。

【註】

- 1) 拙著「斎藤喜博における理論と実践の捉え方」『関西教育学会研究紀要』第8号、2008年、34-47頁。
- 2) 本学では、学長裁量経費及び学内の共同研究費を活用しつつ、2016年12月に福井県全幼稚園、保育所、認定こども園(計337園)を対象としたアンケート調査を実施した(有効回答1831部)。その結果を『福井県内保育者対象アンケート調査研究報告書』としてまとめ、本学の保育者養成の特徴や課題の数値化及びその分析を行なった。特に、県内現場が保育者に求めている資質能力と本学幼児教育学科卒業時点で身につけている学習成果との間に存在する段差の詳細が可視化されたことで、学生への教育内容の改善や現場保育者に対する研修内容の改善等を考えるきっかけとなった。なおこの調査により、福井県内保育者の6割弱(短大が立地する嶺北北部地域に限れば7割弱)が仁愛女子短期大学の卒業生であることが明らかになっている。
- 3) 2018年4月時点と2023年4月時点で比較すると、県内高校3年生女子生徒数は約3800名から約3400名へと1割程度減少することがすでに分かっている(福井県庁政策統計・情報課webページ「福井県の年齢別人口」をもとに算出)。
- 4) 現在本学では、平成30年度私立大学研究ブランディング事業「保育者育成のためのキャリア・ルーブリックの開発～シームレスな高校・短大・保育現場の繋がりを目指して～」(事業取組担当責任者:増田翼)の採択を受け、連携協定を結ぶ市町と連携しながら、保育者育成環境の改善について本格的な議論をはじめたところである。
- 5) Erich Weniger: Theorie und Praxis in der Erziehung, in: Ausgewählte Schriften zur geisteswissenschaftlichen Pädagogik, Weinheim 1975, S. 38.
- 6) 拙著「保育学の学問的性格に関する一考察」『日本保育学会第66回大会発表要旨集』2013年、588頁。